



**JPN Class**

Online school - 日本語で学ぼう

中学

国語  
一年

十一月  
第②週



# 学習を始める前に

## ①必ず用意してください

### ・ノート

(学習しやすいように、漢字のノートと国語のノートを分けるなど工夫をすること。)

### ・筆記用具 (赤ペンも用意すること。)

## ②注意

・大事だと思うところはノートに書いてください。

・このビデオで使っているスライドを印刷したい人は、最後の**お知らせ**を見てください。

・「ビデオを止めてください。」と言われたら、ビデオを止めて、先生の指示に従ってください。



・必要があるときは、ビデオを止めたり、もう一度ビデオを見たりするなど、それぞれ工夫をください。

## 先週の宿題から

### 1. 漢字

新しく習った漢字の復習をしましょう。  
文で書けるように、新出漢字以外の漢字も復習のため練習しましょう。

### 2. 音読

「いろは歌」 「蓬萊の玉の枝」を読みましょう。

### 3. 仮名遣いの違いを見つけましょう。

《現代の文章と古典の文章とでは、言葉遣いのう  
えで異なる部分があります。「蓬萊の玉の枝」  
の中から見つけましょう。》

例..	いふもの	丨	いうもの
	使ひけり	丨	使いけり
	いひける	丨	いいける
	思ひて	丨	思いて
	よそほひ	丨	よそおい
	問ふ	丨	問う
	答へて	丨	答えて

## 漢字テスト①

漢字の読み方を書きなさい。

- (1) 筒の中が光る。
- (2) 娘をなよ竹のかぐや姫と名づけた。
- (3) 結婚したいと集まってきた。
- (4) 恐ろしく思われた。
- (5) 名前を尋ねた。
- (6) 斜面のすそを回った。
- (7) たいそう見劣りがする。
- (8) 宮中に迎え入れる。
- (9) たびたびお召しになる。
- (10) 月を見て嘆き悲しむ。
- (11) 天に昇っていった。
- (12) 煙は雲の中に立ち上った。
- (13) 翁の家を訪れる。
- (14) 御文を燃やすべし。
- (15) その旨を承る。



# 漢字テスト①

## 漢字の読み方

答え合わせをしよう。

- |      |                  |        |
|------|------------------|--------|
| (1)  | 筒の中が光る。          | つつ     |
| (2)  | 娘をなよ竹のかぐや姫と名づけた。 | むすめ ひめ |
| (3)  | 結婚したいと集まってきた。    | けっこん   |
| (4)  | 恐ろしく思われた。        | おそろしく  |
| (5)  | 名前を尋ねた。          | たずねた   |
| (6)  | 斜面のすそを回った。       | しやめん   |
| (7)  | たいそう見劣りがする。      | おとり    |
| (8)  | 宮中に迎え入れる。        | むかえ    |
| (9)  | たびたびお召しになる。      | おめし    |
| (10) | 月を見て嘆き悲しむ。       | なげき    |
| (11) | 天に昇っていった。        | のぼって   |
| (12) | 煙は雲の中に立ち上った。     | けむり    |
| (13) | 翁の家を訪れる。         | おとずれ   |
| (14) | 御文を燃やすべし。        | ふみ     |
| (15) | その旨を承る。          | うけたまわる |

## 漢字テスト②

―線の漢字を書きなさい。

(1) つつの中が光る。

(2) むすめをなよ竹のかぐやひめと名づけた。

(3) けっこんしたいと集まってきた。

(4) おそろしく思われた。

(5) 名前をたずねた。

(6) しやめんのすそを回った。

(7) たいそうみおとりがする。

(8) 宮中にむかえ入れる。

(9) たびたびおめしになる。

(10) 月を見てなげきかなしむ。

(11) 天にのぼっていった。

(12) けむりは雲の中に立ち上った。

(13) 翁の家をおとずれる。

(14) おんふみを燃やすべし。

(15) その旨をうけたまわる。



## 漢字テスト②

―線の漢字を書きましよう。

答え合わせをしよう。

(1) つつの中が光る。

筒

(2) むすめをなよ竹のかぐやひめと名づけた。姫娘

(3) けっこんしたいと集まってきた。結婚

(4) おそろしく思われた。恐ろしく

(5) 名前をたずねた。尋ねた

(6) しゃめんのすそを回った。斜面

(7) たいそうみおとりがする。見劣り

(8) 宮中にむかえ入れる。迎え入れる

(9) たびたびおめしになる。お召し

(10) 月を見てなげきかなしむ。嘆き悲しむ

(11) 天にのぼっていった。昇って

(12) けむりは雲の中に立ち上った。煙

(13) 翁の家をおとずれる。訪れる

(14) おんふみを燃やすべし。御文

(15) その旨をうけたまわる。承る

# いろは歌

いろは歌は、四十七文字の仮名を一回ずつ使って作られている。

現存する最古の「いろは歌」は、一〇七九年に写された「金光明最勝王經音義」に記されたものですが、作者は不明です。当時流行した七音・五音を四回くり返す。「今様」という歌謡形式になっています。仮名を学ぶ手本や、物の順序を示すものとして使われました。

仮名のみの原文や、漢字と濁点をあてた歌を読んで、古文の言葉の調子に慣れましょう。

## 《漢字と濁点を当てた歌》

いろはにほへど 色はにほへど 色は美しく照り映えても

ちりぬるを 散りぬるを (花は) 散ってしまうものである

わかよたれぞ 我が世たれぞ わたしたちのこの世のだけれが

つねならむ 常ならむ (心) 永久に変わらないことがあるだろうか

うみのおくやま いろいろなががある (人生の) 深い山を

けふこえて 今日超えて (いくのだが)

あさきゆめみし 浅き夢見じ 浅い夢など見ることはしない

急ひもせず 酔いもせず 心をまどわされもしない

いろはにほへど  
ちりぬるを  
わかよたれぞ  
つねならむ  
うみのおくやま  
けふこえて  
あさきゆめみし  
急ひもせず



①あとに「散る」とあるので、この「色」は花の色を指す。「にほう」は美しく照り映えるの意。  
②「有為」は常に一定ではないこと。無常であるこの世の中を、超えにくい深い山にたとえた。

蓬菜の玉の枝ほうさい — 「竹取物語」たけとり から —

蓬菜の玉の枝

根が銀、茎くきが金、実しんが真珠じゆできているといわれる木の枝。蓬菜は、中国の古い伝説で東海にあるという理想郷。

今は昔、竹取の翁おきなといふもの(ウ)ありけり。

野山にまじりて竹を取りつつ、よろづ(ズ)のことに使(イ)ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむい(シ)ひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしう(シユウ)てゐたり(イ)。

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根元に光る竹が一本あった。不思議に思っ  
て近寄って見ると、筒の中  
が光っている。それを見ると、(背丈)三寸ほどの人が、まことにかわいらしい様子で座っていた。



《言葉の意味》

三寸さんすんごく小さいことを表す。一寸は、約三センチメートル

《新しい漢字》

筒つつ



これは、「竹取物語」の冒頭の部分である。このあと、物語は次のように続く。

子供を授かったと喜んだ翁は、その子を籠かごの中に入れて大切に育てた。子供は、すくすくと成長して、わずか三か月ばかりで一人前の娘になった。その姿は輝くばかりに美しく、辺りに光が満ちるようであつたから、娘を「なよ竹のかぐや姫」と名づけた。

美しいかぐや姫のうわさが広まると、多くの男たちが、ぜひ結婚したいと集まってきた。かぐや姫は、なかでも熱心な五人の貴公子の求婚を断りきれず、望みの品を持参した人と結婚すると言つて、一人ずつに難題を出した。かぐや姫の望みの品は、いずれも入手至難のものばかりであつたが、五人の求婚者は、それでも姫との結婚をあきらめきれず、それぞれに知恵や富の力で難題にいどむのであつた。

その一人、くらもちの皇子みこは、蓬莱の玉の枝を探しに行く人と人々に告げて、いったん船出するが、すぐ引き返し、かねての計画どおり、人目につかぬ家に閉じこもつた。それから三年間、玉作りの匠たくみたちと寝食を共にして、にせの玉の枝を作らせた皇子は、今船を下りたばかりというふうをよそおつて、翁の家を訪れる。そして、架空の冒険談をまことしやかに物語る。

次の一節は、皇子が、その冒険談のうち、多難な航海の末にようやくのことで探し当てたという、蓬莱山の様子を語る部分である。

## 《言葉の意味》

匠 大工・彫刻師・細工師などの職人。

## 《新しい漢字》

娘 むすめ かぐや姫

結婚 コン



蓬莱の枝を持参したくらもちの皇子

これやわが求むる山ならむと思ひて、  
さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐ  
りをさしめぐらして、二、三日ばかり、  
見歩くに、天人のよそほひしたる女、  
山の中よりいで来て、銀の金鉢を持ち  
て、水をくみ歩く。これを見て、船よ  
り下りて、「この山の名を何とか申  
す。」と問ふ。女、答へていはく、  
「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。  
これを聞くに、うれしきことかぎり  
なし。

その山、見るに、さらに登るべきや  
うなし。その山のそばひらをめぐれば、  
世の中になき花の木ども立てり。金、  
銀、瑠璃色の水、山より流れいでたり。  
それには、色々の玉の橋渡せり。その  
あたりに照り輝く木ども立てり。その  
中に、この取りてまうで来たりしは、  
いとわろかりしかども、のたまひしに  
違はましかばと、この花を折り  
てまうで来たるなり。



これこそわたくしが探し求め  
ていた山だろうと思つて、（う  
れしくはあるのですが）やはり  
恐ろしく思われて、山の周囲を  
こぎ回らせて、二、三にちばか  
り、様子を見て回っていますと、  
天人の服装をした女性が、山の  
中から出てきて、銀のお碗を  
持つて、水をくんでいきます。  
これを見て、わたくしは船から  
下りて、「この山の名はなんと  
いうのですか。」と尋ねました。  
女性は答えて、「これは、蓬萊  
の山です。」と言いました。こ  
れを聞いて、わたくしはうれし  
くてたまりませんでした。

その山は、見ると、（険しく  
て）全く登りようがありません。  
その山の斜面のすそを回つてみ  
ると、この世には見られない花  
の木々が立っています。金・  
銀・瑠璃色の水が、山から流れ  
出てきます。その流れには、色  
さまざまの玉でできた橋が架  
かっています。その付近に、光  
輝く木々が立っています。その  
中で、ここに取つてまいりまし  
たのは、たいそう見劣りするも  
のでしたが、姫がおしゃつたも  
のと違ってはいけないだろ  
うと思ひ、この花の枝を折つて  
まいつたのです。

## 《言葉の意味》

金碗 金属製のお碗。

瑠璃 宝石の一種。つやのある、むらさきがかつた紺色をしている。

銀・輝く 当時は「しろかね」「かかやく」と清音で読んだ。

## 《新しい漢字》

恐ろしい 尋ねる 斜面

ところが、くらもちの皇子が得意げにこう語っているところへ、玉作りの匠たちが、押しかけている。千日余りも働かされながら、まだほうびがもらえない、どうにかしていただきたい、という匠の訴えで、皇子の策略はいっぺんに破れてしまうのである。

ほかの四人も、あるいは大金を使い果たし、あるいは危険を冒して大けがをするなど、目ざす品物を手に入れることができず、求婚はすべて失敗に終わった。

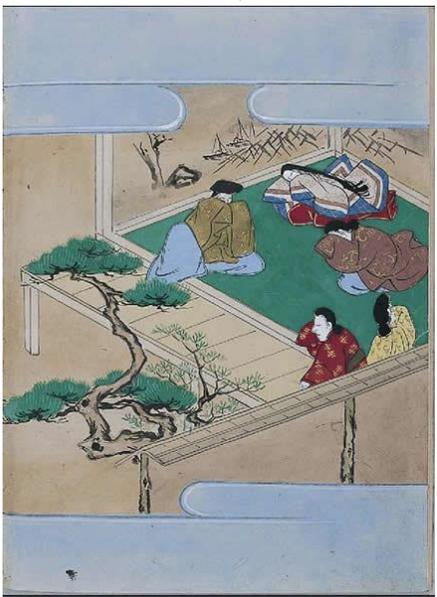
みかど このように人々の心を奪うほどの美しさを備えたかぐや姫を、時の帝は、ぜひ宮中に迎え入れたいと、たびたびお召しになったが、かぐや姫はそれにも応じようとしない。

そうしているうちに、さらに三年の月日がたった。その春の初めから、かぐや姫は、月を見ては嘆き悲しむようになる。秋になってその嘆きがいつそう大きくなるのを見かねた翁が、わけを尋ねると、

「わたしは、実は月の都の者です。

わけあって人間世界に参りましたが、八月十五夜には、月に帰らなければなりません。」

と、涙ながらに打ち明けた。



かぐや姫、月への帰還が近いことを知り、嘆き悲しみ、翁・おうなと共に涙する。

いよいよ中秋の名月の夜、帝は、二千人の兵士を遣わして翁の家を守るようお命じになった。しかし、月の都の人々に対しては、兵士たちも全く無力であった。かぐや姫は、翁には着ていた衣を、きぬ帝には天人の持参した不死の薬を、それぞれ手紙をそえて残し、人々の悲しみをあとに天に昇って行ってしまった。

## 《言葉の意味》

中秋 陰暦の八月十五日。



天に昇るかぐや姫

## 《新しい漢字》

見劣り おと

迎え入れる むか

召す め

嘆き悲しむ なげ

昇る のぼ

帝は、かぐや姫から不死の薬を贈られていたが、かぐや姫のいないこの世にいつまでもとどまる気がしない。そこで、

「どの山が天に近いか。」

とお尋ねになると、ある人が、駿河の国にある山が、都からも近く天にも近いとお返事申し上げたので、その山に使者をお遣わしになった。



かぐや姫の手紙と不死の薬が帝に贈られる

おんふみ  
御文、不死の薬の壺並べて、火を

つけて燃やすべきよし仰せたまふ。

そのよしうけたまはりて、士どもあ

また具して山へ登りけるよりなむ。

その山を「ふじの山」とは名づける。

その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。



## 駿河の国

今の静岡県の一部。昔の国名。

（帝は）お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようにと、御命令になった、その旨を承って、（使者が）兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということから、その山を（「土に富む山」、つまり「ふじの山」と名づけたのである。

その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられる。

## 竹取物語

現在伝わっている日本の物語の中では最も古いものだといわれている。民間に語りつがれていた伝説をもとにして、平安時代の初めごろ作られたと考えられるが、作者はわからない。竹の中から生まれた美しいかぐや姫が、月の世界に帰っていくという幻想的な物語であるが、その中に、人々の喜びや悲しみ、当時の生活などが、生き生きと描かれている。

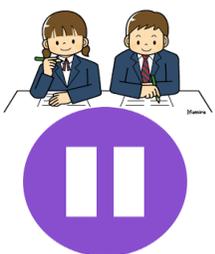
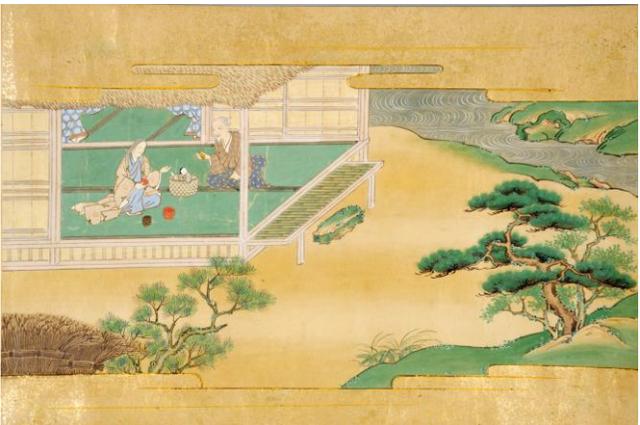
## 竹取物語

現在伝わっている日本の物語の中では最も古いものだとされている。民間に語りつがれてきた伝説をもとにして、平安時代の初めごろ作られたと考えられるが、作者はわからない。竹の中から生まれた美しいかぐや姫が、月の世界に帰っていくという幻想的な物語であるが、その中に、人々の喜びや悲しみ、当時の生活などが、生き生きと描かれている。

竹取物語についてあらましをまとめなさい。次の文の後を書き、あらましをまとめなさい。

- ・ 現在伝わっている日本の物語の中では、最も古いといわれている。
- ・ 民間の伝説をもとにして、平安時代の初めごろ作られたと考えられるが、作者はわからない。

- ・ 竹の中から生まれたかぐや姫が月の世界に帰っていくという物語。
- ・ 人々の喜びや悲しみ、当時の生活を生き生きと描く。



## 古典の言葉

古典の文章には、現代の文章と異なる言葉遣いがある。時代とともに、日本語も変化してきた。

古典語（文語）と現代語（口語）にはどのような違いがあるだろうか。言葉遣いの違いについて考えてみよう。

### (1) 仮名遣いと発音

古典の仮名遣い		現代の仮名遣い
・うけたまはりて	⇓	うけたまわりて
・使ひけり	⇓	使いけり
・いふものありけり	⇓	いうものありけり
・伝へたる	⇓	伝えたる
・天人のよそほひ	⇓	天人のよそおい

―線をつけた「は・ひ・ふ・へ・ほ」について、古くはその仮名のおり「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」と発音されていた。それが、平安時代中ごろから、語頭以外のハ行の音が、ワ行の「ワ・ヰ・ウ・エ・ヲ」の音に変化した。さらに「ワ」以外の音が、ア行の音と同じになった。

〔現代とは異なる古典の仮名遣いの例〕

・うみのおくやま	⇓	ういのおくやま
・けふこえて	⇓	きようこえて
・ゑひもせず	⇓	えいもせず
・よろづのことに	⇓	よろずのことに
・登るべきやうなし	⇓	登るべきようなし

(2) 意味が変化した言葉・古典語だけに使われる言葉

古典で使われる言葉には、形は現代語と同じでも、意味が変わってしまったものや、言葉そのものが現代では使われなくなったものがある。

〔意味が変化した言葉〕

- ・ うつくし ↓ 古典語では、「かわいらしい・いとしい」という様子を表す語として用いられたが、現代語では「美しい・きれいだ」という様子を表す。

〔古典語だけに使われる言葉〕

- ・ あまた ↓ 「数量の多いさま・たくさん」
- ・ いと ↓ 「たいへん・あまりに・とても」

練習問題

―線の部分を、現代の仮名遣いに直しなさい。

- ① いふ
- ② うけたまはりて
- ③ 使ひけり
- ④ 伝へたる
- ⑤ よそほひ
- ⑥ よろづ
- ⑦ やうなし
- ⑧ けふこえて
- ⑨ うみのおくやま
- ⑩ ぬひもせず

う わ い え おい ず よう きょう い え



次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

① 今は昔、竹取の翁おきなといおふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて あたり。

〔現代訳〕

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根元に光る竹が一本あった。

**A** 思って近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、(背丈)三寸ほどの人が、まことに **B** 様子で座っていた。

←「蓬莱の玉の枝」による

(1) ー線① 「今は昔」の意味書きなさい。

(2) ー線② 「竹取りの翁」の名前を文章中から8字で書きだしなさい。


(3) ー線③ ア エを現代の仮名遣いに直しなさい。

ア ① ウ ⑤

(4) ー線③ 「竹を取りつつ」とありますが、竹は何のために取っているのですか。

(5)  A・Bに合う現代語訳をそれぞれ選びなさい。

- A ア 気味悪いと イ 珍しいと ウ 不思議に エ おもしろいと  
B ア 美しい イ かわいらしい ウ おとなしい エ 光輝いた
- A  
B

(6) ー線④ 「寄りてみる」とありますが、この動作をしたのはだれですか。



次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

① 今おきなは昔、竹取の翁おきなといおきなふものありけり。野山にまじりて竹を取りつおきなつ、よろおきなづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄おきなりて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとおきなうつくしうておきなゐたり。

〔現代訳〕

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根元に光る竹が一本あった。

A 思おきなって近寄おきなつて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、(背丈)三寸ほどの人が、まことに B 様子で座おきなっていた。

～「蓬莱の玉の枝」による～

(1) 一線①「今は昔」の意味書きなさい。 **今ではもう昔のことだが**

(2) 一線②「竹取りの翁」の名前を文章中から8字で書きだしなさい。

さ
ぬ
き
の
み
やつ
こ

(3) 一線③を現代の仮名遣いに直しなさい。

④ **いう**      ① **よろ**ず      ② **う**つくしうて      ③ **い**たり

(4) 一線④「竹を取りつつ」とありますが、竹は何のために取っているのですか。 **いろいろな物を作るのに使っていた。**

(5)  A・Bに合う現代語訳をそれぞれ選びなさい。

A ア 気味悪いと イ 珍しいと ウ 不思議に エ おもしろいと  
B ア 美しい イ かわいらしい ウ おとなしい エ 光輝いた  
A **ウ**      B **イ**

(6) 一線④「寄りてみる」とありますが、この動作をしたのはだれですか。 **竹取の翁(さぬきのみやつこ)**



これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩ありくに、天人のよ②そほ①ひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金錠かなまるを持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。』と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。」

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。①その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金、銀、瑠璃るり色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに照り輝かかやく木ども立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違たがはましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

〔現代訳〕

これこそわたくしが探し求めていた山だろうと思って、（うれしくはあるのですが）やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三にちばかり、様子を見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀わんを持って、水をくんでいきます。これを見て、わたくしは船から下りて、「この山の名はなんといっていますか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、わたくしはうれしくてたまりませんでした。その山は、見ると、（険しくて）全く登りようがありません。その山の斜面のすそを回ってみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その流れには、色さまざまの玉でできた橋が架かっています。その付近に、光輝く木々が立っています。その中で、ここに取ってまいりましたのは、見劣りするものでしたが、姫がおしゃったものと違ってはいけないうらうと思ひ、この花の枝を折ってまいったのです。

(1) 一線⑦・⑧を現代の仮名遣いに直しなさい。

ア イ



(2) 一線①「うれしきことかぎりなし」とありますが、なぜうれしいのですか。

(3) 一線②「いと」の意味として  に合うものを選びなさい。

ア たいそう    イ 意外と    ウ わずかに    エ 予想どおり

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩ありくに、天人のよ②そほ①ひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金錠かなまるを持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。』と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。」

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。①その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金、銀、瑠璃るり色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに照り輝かかやく木ども立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違たがはましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

〔現代訳〕

これこそわたくしが探し求めていた山だろうと思って、（うれしくはあるのですが）やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三にちばかり、様子を見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀わんを持って、水をくんでいきます。これを見て、わたくしは船から下りて、「この山の名はなんといっていますか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、わたくしはうれしくてたまりませんでした。その山は、見ると、（険しくて）全く登りようがありません。その山の斜面のすそを回ってみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その流れには、色さまざまの玉でできた橋が架かっています。その付近に、光輝く木々が立っています。その中で、ここに取ってまいりましたのは、見劣りするものでしたが、姫がおしゃったものと違ってはいけないだらうと思ひ、この花の枝を折ってまいったのです。

(1) 一線⑦・⑧を現代の仮名遣いに直しなさい。

ア よそおい イ ようなし

(2) 一線①「うれしきことかぎりなし」とありますが、なぜうれしいのですか。 探し求めていた所に着いたから

(3) 一線②「いと」の意味として [ ] に合うものを選びなさい。

ア たいそう イ 意外と ウ わずかに エ 予想どおり



## 宿題

次回の授業までにやる勉強です。

### 1. 音読

「いろは歌」 「蓬萊の玉の枝」を読みましよう。

2. 「古典の言葉」の説明をもう一度読み、復習をしましよう。

### 3. 問題をしましよう。

次の言葉の意味を書きましよう。

〔意味が変化した言葉〕

・ うつくし ↓↓

〔古典語だけに使われる言葉〕

・ あまた ↓↓

・ いと ↓↓



## お知らせ

1. 質問があったら、メールをください。すぐお返事します。
  2. 自分が書いた文章を見てもらいたいときはメールで送って  
くれば、直して送り返します。
- ❖ メールアドレスは、 [Akiko@JPNCClass.com](mailto:Akiko@JPNCClass.com) です。
  - ❖ このビデオのスライドはWebページ <http://JPNCClass.com> から  
ダウンロードや印刷ができます。



# JPN Class

Online school - 日本語で学ぼう

# 中学

# 国語 一年

# 年間学習表



身につけたい力

7月	6月	5月	4月	
		<p>発見したことを伝えよう スピーチの構成を考え、メモをもとにスピーチをしよう。</p>	<p>野原はうたう 好きな詩を、登場する生き物の気持ちになつて朗読しよう。</p>	<p>話す／聞く 一年間の学習を通して先生の話を聞き、学習を進めよう。</p>
<p>文章の推敲と原稿用紙の使い方 推敲のポイントと原稿用紙のうえでの推敲の仕方を知ろう。原稿用紙の決まりを確かめよう。</p>	<p>情報を文章にまとめよう 自分の身の回りのことについて、情報を集め、文章にまとめよう。</p>	<p>発見したことを伝えよう スピーチの構成を考え、スピーチメモを書こう。</p>	<p>野原はうたう 自分の好きな生き物を選んで、詩を作ろう。</p>	<p>書く 新聞記事 記事の要約をし、記事に対する自分の意見や感想を書こう。</p>
<p>光と風からもらった贈り物 筆者が「高原」のどんなところに、言葉の豊かさを感じているかをとらえよう。</p>	<p>クジラたちの声 クジラの情報伝達に関する二つの問いをおさえ、音の役割、海中での情報伝達に音が最適である理由をつかもう。</p>	<p>ちよつと立ち止まって 各図の説明を通して、ものの見方について、筆者が述べていることをとらえよう。</p>	<p>野原はうたう 作者が生き物の姿にどんな思いを感じているかを、読み取ろう。 にじの見える橋 少年の行動や心情に着目し、にじを見る前とあとの気持ちの変化をとらえよう。</p>	<p>読む 新聞記事 新聞記事を読もう。</p>
<p>混同しやすい漢字 形が似ていたり音が同じであったりする漢字を知り、間違えて使わないように気をつけよう。</p>	<p>言葉の単位 文節や単語に区切る方法を知ろう。</p>	<p>漢字の組み立てと部首 漢字の部分のよび名と表すものを覚えよう。</p>	<p>話し言葉と書き言葉 話し言葉と書き言葉の違いをおさえよう。</p>	<p>言葉</p>

12月	11月	10月	9月	8月		
					話す／聞く	
	<p>いろは歌            仮名のみの原文を、古文の調子にのって読み、聞いてもらう。</p>					
		<p>大人になれなかった弟たち            心に残ったこと、自分の生活と比べてどんなことを考えたのか、感想文を書こう。</p>	<p>手紙を書こう            手紙の形式を知り、目的や相手を考え、手紙が書けるようになるう。</p>	<p>さつき            読み取った内容を、自分自身の体験と重ねて感想を書こう。  <b>読書記録</b>            読んだ本の読書記録を書いて残そう。</p>	書く	
<p>未来をひらく微生物            環境問題について課題を見つけ、レポートにまとめよう。</p>		<p>いろは歌            古文の言葉の響きや調子に読み慣れよう。</p> <p>蓬萊の玉の枝            古典に対する興味や関心をもつて読もう。</p> <p>今に生きる言葉            漢文独特の言い回しに慣れよう。「矛盾」がどんなエピソードからどんな意味に使われるようになったのか確かめよう。</p>	<p>大人になれなかった弟たち            表現に着目し、登場人物の心情や作者の思いを読み取ろう。</p>	<p>麦わら帽子            麦わら帽子やカモメに對するマキの気持ちと、その移り変わりを読み取ろう。</p>	<p>さつき            助けを呼びに走る場面や、助かった正作を見上げる場面の、惇の胸中を表す言葉に注目して読もう。</p>	読む
<p>未来をひらく微生物            自然の仕組みの中で、微生物の働きが、環境問題の解決どのように利用されているのか読み取ろう。</p>		<p>古典の言葉            文語と口語の違いを考えよう。</p> <p>漢字の音訓            音と訓それぞれの読み方と、意味を考えよう。</p>	<p>漢字四字の熟語            漢字四字の意味をおさえよう。</p>	<p>漢語・和語・外来語            漢語・和語・外来語の分類ができるようになるう。</p>	言葉	
	<p>文の組み立て            文の成分のそれぞれの働きや、文節どうしの関係を理解しよう。</p>					

	3月	2月	1月	
				話す／聞く
		心に残る思いで読み手の興味を引くように、発表しよう。		
	言葉を調べよう 言葉についての課題を調べ、資料にまとめる。	心に残る思いで今までの経験で、自分が成長したと思えることや、変わったと思うことを思い出して、文章にまとめよう。	江戸からのメッセージ 江戸の知恵を今の時代に生かせることは何か考え、それをまとめよう。	書く
	胸の底の人と言葉たち 人や言葉との出会いを読み取り、筆者がわたしたちに願うことは何かを考えよう。	少年の日の思い出 登場人物の心情の移り変わりをとらえ、生き方を考えよう。	江戸からのメッセージ リサイクルを徹底した江戸っ子の生活と、そこから導かれた筆者の主張をつかもう。	読む
〈一年生の漢字〉 一年生で習った漢字の復習をしよう。		漢字の成り立ち 漢字の成り立ちをおさえ、成り立ちで意味や読みを類推できることを知ろう。	辞典を活用しよう 国語辞典、漢和辞典の使い方を知り、実際に様々な言葉を調べよう。	言葉
		指示する語句と接続する語句 指示する語句と接続する語句の種類や用法を理解しよう。		